美し国づくり協会 創立20周年記念シンポジウム

満ち足りて心地よく豊かな国に

ＮＰＯ「美（うま）し国づくり協会」（髙梨雅明理事長）は２月18日、東京都千代田区のアルカディア市ヶ谷で創立20周年記念シンポジウムを開いた。効率・経済性一辺倒の都市、地域づくりを見直し、表面的な美しさを超えた「満ち足りて心地よい、美しい国づくり」を目指して活動を展開してきた同協会。20年の節目として、佐々木葉土木学会会長（早大創造理工学部教授）の基調講演や各地で多彩な活動に取り組むキーマンによる事例紹介、パネルディスカッションなどを通じて、これからの美し国づくりのキーワードを探った。

基調講演　「美しい景観づくりの未来を思い描く」

土木学会会長　佐々木　葉氏

平安時代に「景色」「風景」という言葉が漢語として日本に入ってきましたが、「景観」はこれらに比べると新しく、明治時代にランドシャフト、ランドスケープの訳語として使われ始めました。戦前は「美観」という言葉もよく使われ、特に都市や公園に関して目立ちます。「風致」という言葉もあります。戦前の公園や都市、森林を議論する際はこの美観や風致という言葉が多く使われました。そうした言葉の蓄積があり、一時、景観はあまり使われなくなりましたが、１９６０年代頃からわれわれの先輩たちが土木分野で景観を考え始め、２００４年には景観法が制定されました。時代とともに人々がそれぞれの言葉に気持ちを込めて使ってきました。

景観工学が始まった時期は、まさに60年代から70年代の高度成長期で人口が増え、日本各地で大きな開発、インフラの整備が進んでいました。土木分野での景観の議論は、高速道路の形づくりから始まりました。道路の形をつくるということが安全や機能に関わり、ランドスケープの中にどういう形態の道路をつくったら快適・スムーズに運転できるか、そして新しい景観をつくろうというのが出発点でした。

一方、景観法が制定されたのは、失われた30年が始まった頃であり、そこをもう一度立て直そうという時期でした。そうした時に美しい景観は一つの力を持つと思いました。

では、土木学会はこの約20年、何をやってきたかを説明します。一つは土木学会デザイン賞という事業を01年から実施しており、これまでに約２６０件の作品を表彰してきました。また、デザインコンペをもっと進めていこうと、土木設計競技を支援するためのガイドライン作成やウェブサイトの立ち上げなどを行ってきました。

こうした取り組みにより、土木分野のデザインは随分と進みましたが、まだまだ特定の場所以外ではインフラや公共空間の質が必ずしも高まっていないと思います。その背景には「公共事業は無駄をするな」「本当に必要なのかという不信感」「景観を良くするとコストが上がり、機能面でマイナスになるという思い込み」のようなものがあります。加えて地方自治体の人材不足が進み、土木系の職員が全くいないところもあり、景観への配慮がプラスアルファ的なものとして受け止められています。こうした中、われわれは地域課題を解決する総合的な取り組みとして、デザインを進めていこうとしています。

一方で、生きづらさを抱えた人たちのために美しい景観ができることは何かを考えています。伸び伸びと自信を持って生きている人がどんどん減っている現実があり、物理的に困窮している人たちもたくさんいます。そういう人たちに一息つけるパブリックスペースを無料で提供する、あるいは小さな参加の機会をまちの中につくっていくことも大事です。美しい景観とは、目に見える美しさから目に見えないものを思い描いていくことかもしれません。さまざまな文脈に美しい風景、美しい景観、美し国づくりを載せながら議論していくことが必要ではないでしょうか。

新たな次元へ鍵探る

美し国づくり協会理事長　髙梨　雅明氏

当協会の青山俊樹顧問が国土交通事務次官だった２００３年に「美しい国づくり政策大綱」がつくられました。これをきっかけに、国とは違った視点でさまざまな関係者と連携しながら「美し国づくり」に取り組もうと05年１月にＮＰＯ法人として認証を受けてちょうど20年がたちます。

視点の一つに美しさという価値観を地域づくりやものづくりに生かすことがあります。自然も大切にしていく中で、単にものづくり、空間づくりということではなく、日本の国を世界に誇れる、豊かで満ち足りた立派な国にしたいという思いが込められています。

この間、さまざまなシンポジウムや美し国づくり大賞という顕彰事業、出版事業などに取り組んできました。本シンポジウムでは、土木学会の佐々木葉会長や各地で活動している皆さんからお話しを聞き、新たな次元に向けたキーワードを探していきたいと思います。

デザインで地域課題を総合解決

百武氏

明石氏

小野氏

藤田氏

榊原氏

出席者
- ■ＮＰＯ都市デザインワークス代表理事　榊原　進氏
- ■横浜市みどり環境局担当理事　藤田振一郎氏
- ■小野組社長　小野　貴史氏
- ■グリーンノートレーベル代表取締役　明石　博之氏
- ■コーディネーター　県立広島大学大学院経営管理研究科教授／美し国づくり協会理事　百武　ひろ子氏

パネルディスカッション

自然・暮らし・人の観点でキーワードは「楽しむ」

百武　これからの美し国づくりのヒントとして、「自然」「暮らし」「人」という三つの観点で掘り下げていきたいと思います。まずは都市と自然の混じり合いについてお話し下さい。

藤田　横浜市では樹林地を守り、その一部を市民の森として整備しています。維持管理は地域の方々や愛好会組織などの皆さんに支えられてきましたが、そういった方々が少なくなってきているのが実情です。いかに楽しみながらそうした活動をしていただけるかが課題となっています。

榊原　仙台市内を流れる広瀬川の石岸側には戦後、米軍キャンプなどがあったため、最近まで市民が気軽に行ける場所ではありませんでした。ただ、歴史的な遺産や自然がたくさんあり、近年はガイドツアーなどが増え、ガイドする方々の活動の輪もどんどん広がってきています。

明石　富山の内川は自然でありながら漁業の現場であり、産業の基盤となっています。東京から内川に移住した際、自分の中で欠落していた観点が漁業の文化でした。自然と都市の間に産業をしっかり位置付けないと、まちは成り立たないと思います。

小野　地域に住む先輩から「お祭りはその瞬間を楽しむだけでは駄目だ」と教えられました。お祭りの前後が大切で、みこしが通る町筋を当社の社員と地域の皆さんと一緒に掃除しています。地域に貢献することが大事な縁となり、それが美しい風景やまちづくりにつながると思います。

百武　「楽しむ」ことがキーワードという気がしますが、どうすれば楽しむ人を増やすことができるでしょうか。

明石　内川というまちは楽しみ方を知らない人が歩いたら全く楽しくないと思います。でも、楽しみ方さえ分かればすごく面白いまちです。クリエーターの方々が気に入ってドラマのロケ地に使ったり、何気ない路地や水面に浮かぶ漁船の写真を撮ったりしています。こうした楽しみ方をレクチャーしてくれる人たちがいたら良いと思います。

榊原　先ほど話したガイドの方々はまちの楽しみ方や、同じものでも見方を変える方法をよく知っています。このほかにも公共空間を利活用していると、その空間を楽しんでいる人たちがたくさんいて、それを見て自分もやってみようというふうになっています。

藤田　横浜にはデザインや芸術の分野の人たちが集まっていると思います。その理由は詳しく分かりませんが、そうした分野の方々が活動しやすい場の提供に積極的に取り組んできました。例えば黄金町の高架下にあった違法店舗の取り締まりをきっかけとしたまちづくりを進めました。そこは現在、多くの芸術家が活動する空間となっています。

百武　佐々木先生（土木学会長）、何かお聞きしたいことはありませんか。

佐々木　パネリストの皆さんにお話しいただいたような取り組みが未来をつくっていくけん引力になるのは間違いありません。一方でマイノリティーであるとも思います。マジョリティーの皆さんは便利ですぐ近くにコンビニがあって、インターネットで何でも買えて、冷暖房の効いたところで仕事をしたいと考えているのではないでしょうか。皆さんのように一点突破で頑張っている力をマジョリティーの人たちに対してどういう風穴を開けていくか、戦略があれば伺いたいと思います。

小野　実はあまり悲観はしておらず、地方の方がやりやすいと思っています。なぜかと言うと、生活必需品が足りていないとか、病院や外食できるところが少ないとか、そうしたところに直接的にアプローチできるからです。インパクトが大きく、喜んでもらえます。特に建設業はそういうパワーを持っていると自負しています。就活生にも都会より地方に就職した方が〝ヒーロー〟になれると呼び掛けています。

藤田　地域住民や商店街、企業などが主体となって取り組んで成功した事例を増やし、楽しめるものをつくっていくという好循環を構築することが大切だと思います。横浜のような都市にはそのような事例がたくさんあるはずです。

榊原　一人では実現できないことに対して、いかに共感してくれる人たちをつくっていくか、仲間を集めるかが重要です。公共空間づくりには当然、行政が関わってきますが、行政も危機感を持っていますので、積極的に巻き込んでいくべきだと思います。

明石　私の仕事の大切なミッションの一つが「感じる」ことです。まちの文化や産業を感じる装置として、場をプロデュースする感覚ですが、置き換えると「インフラ」という言葉がすごくフィットしています。いろいろなことにこのインフラを当て込む戦略、例えば「感激インフラ」「楽しみインフラ」などが良いと思っています。ハード思考のインフラではなく、ソフトの見えないインフラが共通の場にもなり、言葉にしなくてもよい部分を代弁してくれるような気がしています。

インフラが言葉を代弁 心動かすまちづくりへ

百武　「美し」がこれからのインフラになれば、この先の20年が見通せるかもしれません。インフラという基盤になる部分に「美し」という形容詞が入っていて、そこには「楽しさ」「居心地の良さ」「共感できる」「ヒーロー」といった心を動かす言葉が埋め込まれている。そうしたまちづくりが今後の「美し国づくり」の目指すべき先にあると感じました。

事例紹介

みんなの『いいね』がまちになる～せんだいセントラルパーク構想～

榊原　進氏

杜の都・仙台には緑豊かなパブリックスペースが多く、この緑と都心の連なるところを「せんだいセントラルパーク」と位置付けて20年以上にわたって活動しています。

フェーズ１として、ビジョンをつくり、「構想」とも「妄想」とも言える情報発信をしてきました。具体的にはデザインガイドブックの出版やホームページ制作、模型の紹介などです。いろいろな人たちを巻き込みながら「こんな暮らしができたら良い」ということに取り組んできました。

フェーズ２として、さまざまなアクションを起こしています。例えば、橋をひたすら巡るツアーや乗馬体験、水辺サウナ、ピクニックなど。３日間限定で公園と広瀬川、まちをつなぐ飛び石橋体験にも取り組みました。

私たちが「妄想」と言っているビジョンに共感してくれる人がたくさん集まっています。今後もさまざまなセクターやジャンルを超えた多様な主体と協働しながら、全ての人が自由に過ごせる居場所を増やしていきたいと思っています。

横浜から美しいグリーンインフラを目指して

藤田　振一郎氏

横浜市では、2006年に策定した「水と緑の基本計画」に基づき、緑被率の向上や緑と農地の保全などに取り組んでいます。09年にはこの基本計画の重点な取り組みとして、「横浜みどりアップ計画」をまとめました。財源の一部にみどり税を活用する枠組みで５カ年計画としています。

みなとみらい地区にあるグランモール公園は、第５回「美し国づくり大賞」を受賞しました。整備から25年ほどたっていたこともあり、19年の都市緑化フェアの会場の一つとして再整備しました。

27年には市内で国際園芸博覧会（ＧＲＥＥＮ×ＥＸＰＯ2027）が開かれます。テーマの一つとしてグリーンインフラの実装が掲げられています。会場は「旧上瀬谷通信施設公園」ですが、博覧会後はネイチャーポジティブ（自然再興）やカーボンニュートラルなどを体現できるような公園として再整備していく予定です。

これまでは緑の保全を中心に取り組んできましたが、今後は横浜らしく美しく使いこなすという視点を持ち、風景の文化として進化させていければ良いと考えています。

地域と一体となったコミュニティー活動～おまつり編～

小野　貴史氏

私が住む新潟県胎内市は宿場町でした。庄内に向かう街道と米沢に向かう街道の分岐点であり、イザベラ・バードが立ち寄ったこともあります。

私ども小野組は、1914年に開通した羽越線の工事に携わりました。土を掘っていたところ、観音様と地蔵様が出てきたそうです。うちの初代は「何かのお告げに違いない」と思い、ほこらを建てたとのことです。

その後、駅や街道とつながる道路、新しい町ができました。新しい町に神様が必要ということになり、初代の家にあったほこらを祭ることになったのです。

お祭りは単なるイベントではなく、地域の文化、営みそのものだと思っています。お祭りの前は地域の人たちが一緒にのぼりを立て、掃除をして道路を清めます。お祭り後もみんなで後片付けを行っています。

当社の社員は入社後３年間、必ずおみこしを担いで地域の人たちと歩きます。今後も地域をきちんとつくっていくプレーヤーとして、頑張っていきたいと思っています。

日本のベニス『富山・内川』の美しい風景に寄り添うまちづくり

明石　博之氏

富山県射水市の内川地区は、日本のベニスといわれており、1,300年続く漁師町です。まちの真ん中に内川が通って、その背後には立山連峰が見えるすてきなところです。内川に移住する前は東京でまちづくりのコンサルタントをしていましたが、現在は場づくりプロデューサーをなりわいにしています。

最初は東京から来た人が特殊なことをやっていると見られていたと思いますが、水辺が見える建物のリノベーションをカルチャーに変えようと取り組み始めたところ、除々に協力してくれる人たちが現れました。

ただ、私の活動は目に見えない文化インフラをつくっていることで、決してリノベーション屋でもなければ、景色を良くしようという立場の人間でもありません。人々がうねって人が人を呼ぶ連鎖をつくり文化インフラを増やそうという活動です。このうねりを大きくし、単なる観光による活性化ではなく、ここで暮らしながら豊かな生活ができるまちづくりを目指していきたいと思っています。